

平成27年度 輪之内町立仁木小学校 自己評価書(来年度へ向けて)

学校の教育目標	ひろい心もち 豊かに表現できる子
経営の重点	1. 子どもの夢を育む教育の推進 2. 「まごころ」いっぱいの学校(陰日向なくひたむきにがんばる子) 3. 確かな学力の定着を図る指導の充実 4. 温かさとしんがさをもち、子どもに寄り添う共感的生徒指導と教育相談の充実(啐啄同時) 5. 家庭や地域と連携し、信頼され愛し誇れる学校づくり 6. 教育のプロとしての自覚を高め、人間性を磨き、指導力を高める自己啓発

※評価欄の記号 評価基準 A:実践し、効果をあげることができた。 B:実践し、一応の効果をあげることができた。 C:実践し、僅かだが効果をあげることができた。 D:実践したが、効果をあげることができなかった

町の重点	評価の観点	評価	今年度の成果	来年度への課題と改善策
【学校経営】 全教職員が協力して活力ある学校経営をする	1 ◎ ＜特色ある学校＞保・小・中の一貫性のある指導を充実させ、各学校の児童生徒や地域の特色を生かした創意ある教育課程を編成・実施する。	A	・総合的な学習など、地域を題材とした活動に取り組むことで、地域の特色を生かした教育課程を編成することができた。 ・保・小の連携については連携協議会において、小・中の連携については町教育振興会の各部会において、それぞれ話し合うことができた。	・総合的な学習の時間の時数が以前より減少しており、また職員や児童の数も減少していることから、活動を進めるに当たって無理が生じているものもある。地域との連携は大切にしながらも、必要に応じて内容の縮減を図っていく。
	2 ＜開かれた学校＞学校の教育方針や指導改善に向けての方針を受けた教育活動を積極的に公開し、学校評価や児童生徒の実態等を学校経営に生かし、開かれた学校づくりを推進する。	A	・学校報「みのり」を通して、学校の教育活動の様子や校長の経営方針を伝えることができた。 ・授業参観やフリー参観の時間等を設け、子どもたちの様子を保護者に見てもらった。また保護者の学校への評価や意見を、アンケートに	・12月に実施している保護者アンケートを年2回に増やし、保護者による学校への評価や意見を、学校経営により反映できるようにする。 ・ホームページの更新に努め、学校の様子や方針をより広くより早く伝える。
	3 ＜危機管理＞児童生徒の命を守りきることを最優先に考え、全教職員が危機意識をもって一人一人の安全・安心の確保に努め、学校内外の環境を見直すとともに、家庭・地域社会・関係機関等との連携強化を図り、適切かつ確実な危機管理体制を確立する。	A	・いろいろな場を想定した命を守る訓練を毎月1回行い、自分の命は自分で守る子どもの育成に努めた。 ・保護者引き渡し下校の仕方を再考し、安全に確実に引き渡せる体制を作ることができた。 ・校内の安全点検(遊具含む)を毎月行い、複数の職員によって点検することで、不備のある箇所に迅速な対応ができた。	・安全な登下校について、地域や保護者ともより連携しながら、登校班長にリーダーとしての自覚を持たせていく。 ・月2回の職員による登校指導で、全職員が共通の視点を持って指導にあたるようにする。
【研修】 自己の課題を明確にし、主体的に研修を進め、確かな指導力を身に付ける	4 ◎ ＜校内研修＞校内の主題研究を組織的・計画的に推進するとともに、教職員としての専門性や確かな指導力を高める研修を主体的に行う。	A	・年度初めに授業改善策を周知するための会を実施した。「守る・続ける・鍛える」の合い言葉で学習規律・学習姿勢について共通理解を図り、個々の「こだわり」指導に生かすことができた。 ・総合と生活科の研究については、10月の県大会を中心に各学年ともに実践を残すことができた。新しく赴任してみえた先生方もこれまでの実績を参考にしながら研究構想を立て、児童の実態に応じた学習を計画・実施することができた。その成果を職員に還元することで、個人研修を全体に還元することができた。週案等にこれからの実践課題を書き留めることでより実践への意識が明確になった。	・全国学調・県学調やCRT学力検査等からも児童の国語科・算数科等の教科指導の課題が山積していることは否めない。そこで来年度から教科研究にシフトチェンジしていく方向で考えたい。特に算数科の学力は全国値と比較しても開きがある。 ・校内研究会を部研ではなく全員参加型の研究会にして全校体制で授業改善に臨んでいく。 ・職員会を隔月にして校内研修会をタイムリー
	5 ◎ ＜個人研修＞経験年数や職務に応じて、一人一人が個人研修課題を明確にし、具体的な目標と方策をもち、教職員としての資質や能力を高める研修に主体的に取り組む。	A	・教育センター等に自主的に参加することができた。その成果を職員に還元することで、個人研修を全体に還元することができた。週案等にこれからの実践課題を書き留めることでより実践への意識が明確になった。	・個人研修に積極的に参加するよう呼びかけると共に、個々の研修成果を本年度と同様周知することを心がける。
	6 ◎ ＜情報研修＞分かる授業のためのICTの効果的な活用法及び情報モラル等、情報活用能力の向上に関わる実践的かつ効果的な研修を行う。	A	・毎日デジタル教科書を使って指導をした。視覚効果を図った。ICTの活用に積極的な姿勢が見られた。 ・電子黒板をフル活用し、算数科を中心にしてシミュレーション教材を自作して臨むことができた。 ・どの教室でも常時パソコンが立ち上げられ、板書を工夫しながら画面を位置付けている。操作手法にも慣れ、学習効率が上がっている。	・来年度も引き続き活用を推進する。 ・終礼や職員会等での情報主任からの呼びかけを位置付け、実施内容やホームページの活用等について確実に実践していきけるようにする。 ・校内研修会の内容を工夫し、情報研修の場を計画的に位置付けて、教員への啓発活動とする。
【教科指導】 基礎的・基本的な知識・技能の習得を図るとともに、思考力・判断力・表現力及び自ら学ぶ意欲や態度を育てる	7 ◎ ＜基礎基本の定着＞指導目標と評価規準を明確にした指導計画のもと、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得とそれらを活用し、思考力・判断力・表現力を育てる授業を実施する。	A	・漢字・計算を中心とした「みのりチャレンジ」など定期テストに向けた実践は充実していた。児童の意欲もテストへの意欲が高く、合格を目指して頑張る姿が見られた。 ・終末の10分間をとって見届け、やりきりの時間として位置付けてはいたが、中から下位層の児童を底上げするまでには至らなかった。	・定期テストの実施は継続していく。家庭学習の課題も含めてやりきりと丁寧な見届けを継続していく。 ・全校体制で臨む授業スタイルを再度見直し、焦点化と積み上げの実践を継続する。
	8 ◎ ＜個に応じた指導＞指導内容の系統性、発展性や児童生徒の発達の段階を踏まえ、一人一人の学力や学習状況に応じた多様な指導方法や体制、評価を工夫改善してきめ細かな指導をし、確かな学力の定着を図り、その状況や実態を見届ける。	B	・授業の過程の中に【一人学び】の時間が位置づけられていた。教科の本質に見合う課題が与えられ、時間をとって考える学習過程が見られた。 ・ひとりひとり自分の考えを書くなど個々の学ぶ姿勢は前向きな姿が見られた。	・個人カルテ(評価規準を明記・シンプルにねらいを焦点化)を作成して、個の学びの定着度合いを確実に把握する。 ・評価テストの分析や発展問題、過去問を解くなど学力の定着に応じたタイムリーな【できるまで指導】を徹底する。
	9 ◎ ＜学習集団づくり＞児童生徒の発達の段階に応じた各教科の学び方を身に付け、学び合う学習集団へと質を高めるとともに、学習習慣を確立する指導を充実する。	B	・学級目標づくりから一年間を通じて行事のめあてに関わらせたり、学級の成長の度合いに応じてその場その場での適切な指導がなされていた。 ・学級目標に立ち返って意識しながら児童に投げかけ、その変更を通信等で定期的に伝えるなど家庭への発信も効果があった。	・教科指導の基盤に【学級経営】があることを肝に銘じて自己開放できる、支えてくれる教師や仲間がいる安心感の中で児童が活躍できる学級をつくることに今まで以上にこだわっていく。 ・全学年が単学級になることもあり、それぞれの学年カラーを大切にしながら伸びを交流し、悩
【道徳教育】 自己を見つめる力と他を思いやる心を育てる	10 ◎ ＜全教育活動を通じた道徳教育＞道徳教育推進教師を中心として、道徳指導別業を活用し、全教育活動を通して道徳教育を充実させる全体計画や指導計画を工夫改善する。	B	・道徳計画訪問に向けて、指導計画や別業の見直しを行い、重点項目や全項目が含まれているかについて確認して進めることができた。	・行事や各教科との関わりについて常に考え、より一層意識を高めるために「私たちの道徳」を活用していく。関連づけて行った内容を別業に朱書きをしていく。
	11 ◎ ＜道徳の時間＞道徳の時間のねらいを明確にし、道徳的価値の自覚を深め、道徳の実践力が育成されるよう、指導過程や指導方法を工夫する。	B	・全校木曜日の時間割に道徳を位置づけ、場面絵や資料を活用して実践することができた。	・道徳の時間の学習のようすや意見、「私たちの道徳」に書き込まれた児童や保護者の考えを学年通信に載せてさらに広げようとする。第0回というように積み重ねを板書に表す。 ・「考える道徳」「議論する道徳」に向けて発問や指導過程の工夫をする。
	12 ◎ ＜心を育む体験活動＞ふるさと教育や「あいさつ・美化・ボランティア」への取組を通して、自己を見つめ、他を思いやる指導を充実する。	B	・まち探検や懸産菊・米作り・特別支援学校・お年寄りとの交流などを通して、働いている人や相手の気持ちを考え行動する大切さを知る機会をもつことができた。	・挨拶については、されてから返すところの段階で自分から進んでできるように委員会やひきあいの日の取り組みと連動させて活性化させる。
【小学校外国語活動】 外国語を通じて、コミュニケーション能力の素地を養う	13 ◎ ＜指導計画・指導体制＞児童の実態や学習段階を考慮した指導計画を工夫改善し、一人一人にコミュニケーション能力の素地が養われるよう指導を充実する。(小)	B	・学級や子どもたちに応じて指導計画を工夫することができた。	・1時間の流れが子どもたちに分かるようにカードなどを使って考えていきたい。(パターン①挨拶②歌③トピック④aim⑤チャンツ⑥トライ⑦ゲーム⑧グッバイ)
	14 ◎ ＜指導過程＞積極的に外国語を用いてコミュニケーションを図ることの楽しさを体験する活動を工夫する。(小)	B	・カラ先生のもと、子どもたちは楽しく英語の学習をしていた。 ・児童は楽しく外国語を用いてコミュニケーションをはかることができた。	・ルールについては、外国のやり方で子どもたちに戸惑うこともあったので今後は、今までやってきた日本語向けのやり方で行ないたい。 ・担任主導の授業を仕組んでいく。
【総合的な学習の時間】 探究的な学習を通して、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる。	15 ◎ ＜全体計画・指導計画＞小・中学校の接続や各学校の目標を踏まえ、学習のねらいや内容、各教科等との関連を一層明確にし、課題意識が連続発展するよう全体計画や指導計画を工夫改善する。	A	・各学年のこれまでの実績を基に今年度も児童の実態に合わせて改善し取り組むことができた。 ・これまでの積み上げがあるため仁木小独自のカリキュラムが充実している。	・来年度は研究の方向を変更する可能性があるため、これまでの研究で深めてきた財産を大切にしながら、確実に実施していきたい。
	16 ◎ ＜探究的な学習＞身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、総合的に働かせるよう、体験活動と言語活動を意図的に設定し、探究活動を充実する。	B	・意欲的に追究する姿を生み出す体験的な学習や授業を目指して取り組むことができた。他教科での言語活動の充実が課題であるが、総合の授業の中では意図的な位置付けがされている。特に活動が充実してくる2学期は成果が	・各教科での言語活動の充実を基盤にして、総合の中でも学びの集大成として力が発揮できるように意図的な場を位置付けていきたい。

町の重点	評価の観点	評価	今年度の成果	来年度への課題と改善策
【特別活動】 所属感を高め、よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる	17 ◎	B	・企画委員会を中心に、児童集会・音楽集会運動会・人権集会・感謝の会を進め、全校的な活動の動きを作り出すことができた。	・計画をした通りに進めていくことはできるが、自分たちで問題を見つけ、全校に働きかけていくことは弱い。委員会の核となるこだわり活動(生活委員会の下校時刻)などを広げ、実りある活動にしていきたい。
	18 ◎	B	・学年の実態に応じ、様々な行事と関わらせながら目標に向けて取り組むことができた。	・行事や諸問題に対し、計画・実践・振り返りのサイクルで集団や仲間とのつながりを目指したが十分に高まらないのが現状。また、他学年とのつながりや下級生に対する思いやりの気持ちも弱い。全校体勢で見届けていきたい。
【生徒指導】 共感的な理解に徹し、自己指導能力を育てる	19 ◎	B	・毎月、月初めの読書・相談の際にアンケートをして、その内容を元に個別指導を行ってもらっている。 ・生徒指導交流を終礼後に位置づけたことで、他クラス、他学年の動向も分かるようになり、教師間の共通理解が深まった。 ・3学期からは無記名のアンケートを行い、記名だと書けなかった子ども書くようになり、実態がより理解できた。	・下校時に校門で並ばせても平気で抜かしたり、班員を置いていってしまう姿が見られる。教師が地区に立つ場合には誰がいて誰がいないのか班員が分かるように名簿を持って行くようにする。名簿を元に地区担当と班長と話し合う場を月に1度もち指導を行う。 ・笛は廃止し、登校班長、副班長は率先してあいさつをするように重点をおく。横隊は信号のある場所のみ行う。
	20	B	・校舎改修感謝の会や巣立ち運動など、児童の声で行われる行事があった。	・代表委員会や企画委員会を中心となって、自分たちがよい学校にしていきたいという気持ちをもたせ、児童の意見を出させ行事を自分たちが行っている意識させる。
	21	B	・道徳や命を守る訓練の際に命の大切さや、真剣に行うことについて徹底している。	・悪口、見つからなかったらよい考え方の児童もまだいる。教師側で共通理解をし、だれも同じスタンスで指導していくようにする。
【進路指導】 自己の生き方を考え、主体的に進路を選択できる能力や態度を育てる	22 ◎	B	・6年生の巣立ち活動のなかに、奉仕活動や清掃が位置づけられている。 ・学年ごとに、係活動を位置づけ、事前指導も行なっており、発達段階に応じた取り組みができるようになったが、十分やりきれなかったところがあった。	・係活動では、具体的な場や責任をもたせる。 ・清掃では、ルールや掃除のやり方を全校統一して、徹底する。
	23	B	・「ガイダンス」一人一人が自己の能力・適性や多様な可能性を理解し、将来の夢や希望の実現に向けて自分のよさを生かし主体的に進路選択ができるよう、個に応じた正確な情報提供や説明及びそれらに基づいた学習等のガイダンスの機能を充実する。(中)	
【健康教育】 運動に親しみ、進んで健康で安全な生活を営む態度を育てる	24 ◎	A	・「保健・安全・食」児童生徒の体力・運動能力、食生活等の生活習慣、心身の健康状態及び安全に対する意識・行動を的確に把握するとともに、他の教育活動との関連を踏まえて「健康・安全・食」に関する指導を工夫改善する。	食に関する指導を年間計画に位置づけ、どの学年も年に1時間は実施する。給食訪問時に、月のねらいに沿ってされる栄養教諭からの指導を充実させる。
	25	A	・「運動推進」児童生徒が課題や願いをもって積極的に体力づくりに取り組み、日常的な運動実践の場や機会を充実する。	朝マラソンは、来年度も、100周の目標をめざしてがんばる。正確な集計をとるために、朝マラソンの後に体育委員が学級の前で振り回したり、担任がマラソンの色紙や集計を見届けたりする。そして正確な記録とする。 縄跳びは、朝礼の後に運動会のように分列させ、1学級を2列にして、5分間準備運動をして、残りの5分は、めあてをもつて跳び、数を数えて、進捗表を進める。
	26	A	・「未然防止」児童生徒の健康・安全を守りきるために、学校と家庭、地域社会が連携した組織体としての総合的な力を発揮し、健康被害等の未然防止に万全を期す。	・連れ去り防止教室を位置づける。
【特別支援教育】 一人一人の教育的ニーズに応じ、自立した社会参加するための基盤となる力を育てる	27	A	・「校内支援体制」特別支援教育コーディネーターを中心として、保育園や関係機関との連携を図りながら、ケース会議等で児童生徒理解を図り、全教職員が組織的に指導する。	・外部からの専門員等を積極的に招き、個の困り感に応じた支援が継続してできるようにする。 ・特別支援教育コーディネーターが全校児童の様子をこまめに観察し、気になる児童については校内教育支援委員会に諮り、適切な就
	28 ◎	B	・「個別の支援」保護者や関係機関との連携の下、一人一人の教育的ニーズに応じて「個別的教育支援計画」及び「個別の指導計画」を活用し、一貫した支援を行う中で、一人一人が能力や特性を伸ばし、主体的に活動できるよう指導内容や指導方法、評価を工夫改善する。	・個別的教育支援計画については、特別支援学級児童のみでなく、通常学級の児童についても必要に応じて作成する。そして家庭訪問や個人懇談の時を利用して、保護者と共通理解を図り、作り上げていく。
	29	B	・「交流及び共同学習」特別支援学級等と通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習を計画的・継続的にを行い、社会性や豊かな人間性を育むことができるよう指導を充実する。	・個の実態に応じて参加する授業時間の見直しを図り、また給食時間等の参加もしていくことで、より社会性を大きくする機会を増やす。
【人権教育】 不合理な差別をなくし、人権を尊重する温かい人間関係を醸成する	30	B	・「人間関係の醸成」互いのよさを認め合い、温かく思いやりのある望ましい人間関係を醸成する指導を工夫改善する。	・人権にかかわる取り組みは、1学期から始めて、年間を通して行い、常に仲間への思いやりをふり返りができるようにしていく。
	31 ◎	B	・「いじめ・差別の解消」いじめや差別を許さない学校・学級づくりに徹し、全校が一丸となった取組を継続的に行う。	・教師の目だけでなく、子どもたちも仲間の「差別」「いじめ」に対して敏感に感じ取り、声をあげられるような人間関係を作っていく。
【情報教育・図書館教育】 児童生徒の情報モラルを高め、情報化社会に対応できる情報活用能力を育てる・日常的に読書に親しみ、教養・価値観・感性を高めようとする態度を育てる	32	B	・「情報活用能力」情報活用能力における児童生徒の実態を把握し、段階表に基づいた系統的な指導をする。	・引き続き、段階表に基づいて学年に応じた情報モラルの指導を行っていく。
	33 ◎	B	・「情報モラル」情報モラル(SNSを介したネットトラブル等)について、意図的・効果的な指導を行う。	・今後もアンケートを継続して行い、アンケート結果を基に児童へ指導をしていく。 ・情報モラルについて引き続き講師を招き、指導をしていく。 ・始業式や入学説明会などで保護者に向けて、情報モラルの啓発活動を行ってはどうか。
	34	A	・「図書館教育」学校図書館を利用しやすく整備し、図書館の計画的な活用や読書活動の推進に取り組む。	・委員会活動の一つとして昼の放送などで本を読むように呼びかける。 ・朝読書があるが、キャンペーン中の朝読書の時には、先生の読みかせやPTAの読み聞かせなどを取り入れてはどうか。
【ふるさと教育】 「ふるさと輪之内」に学ぶ態度と輪之内を愛し、誇りに思う心を育てる	35 ◎	A	・「ふるさと学習」地域を知り、理解するための活動や地域人材を活用した授業を展開するなど、地域に根ざしたふるさと学習を積極的に推進する。	・教師や児童は総合の授業の発言やポートフォリオから「ふるさとに愛着を示している」と感じているが保護者アンケートにはなかなか反映されない。さらにホームページを活用したり、通信に記録していくなど活動の内容や意義を発信していく必要がある。地域とのつながりを強化するためにも有効である。
	36	B	・「国際交流」国際交流などを通して、グローバル化に対応した豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化を理解する力等を身に付けられるようにする。	
【家庭学習の充実】	37	B	・「家庭学習習慣」家庭学習の手引きを活用し、望ましい家庭学習の習慣の定着を図る。	・より確実な学力定着に向けて学校で購入したプリントや習熟用分野別プリントなどを課題に出すなど強化したい内容に焦点化した家庭学習を工夫する。 ・低・基礎・基本のドリル学習 中:日記指導を核にした書く力の育成 高:自主ノートの継続など発達段階に応じた家庭学習の重点化を図る。 ・読書指導の強化。キャンペーン等の強調週間のみにあらずに朝活動や音読指導に関わらせて家庭でも「文字に触れる」時間を生み出したい。

※評価欄の記号 評価基準 A：実践し、効果をあげることができた。
B：実践し、一応の効果をあげることができた。
C：実践し、僅かだが効果をあげることができた。
D：実践したが、効果をあげることができなかった